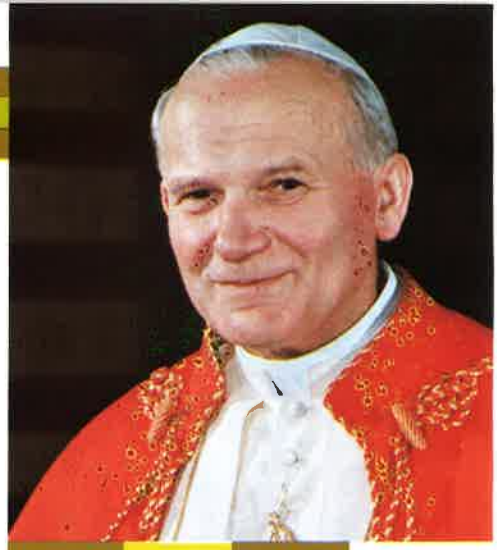
平成2年(1990年)9月10日　教皇様の殿　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
9　SEPTEMBER, 1990　毎月10日発行　第125号



教皇様の殿

神不在の世界建設の試み

〔プラハの要人たちへの挨拶において、共産主義の失敗を指摘された。〕

全てが経済的崩壊で始まったかのようです。豊かな生活という目標に向かって、新しい世界、新しい人間を作り上げるために選ばれたのが経済という分野でした。しかし、それは完全に現世的視野に限られた計画に従ってなされました。悲劇的な夢想であることが顕わになりました。というのもペルソナとしての人間の本質的な面――人間(ペルソナ)が唯一かけがえのない存在であること、自由と真理への決して満たすことのできぬあこがれ、神との超越的な関係なしには幸福でありえないこと――を忘れ去ったか、あるいは否定しているからです。人間(ペルソナ)のこのような面を否定できるのは一時期だけであって、いつまでも続くものではありません。神無き国家の建設は、空しい試みであることが明らかになったのです。こうなることは明らかでした。ただ、その時期と方法がわからなかっただけです。

全物質主義の心は恐れが巣喰っています。〔有識者との会見で強調された。〕人間から、人生の真の意義を奪い去ったときに唯一残る虚無の恐れのことです。物質主義を基盤とした政治機構は、恐れを栄養とし、恐れをもって維持されます。皆さんは恐れを克服なさったのです。(…)今日、私たちは歴史に数多くみられるバベルの塔の一つが、廃墟と化したのを見ています。過去に建設しようとした建造物には超越的な面、つまり霊的な面が欠けていました。一つの社会、文化、人類の一致と兄弟愛をうちたてるためにいくら努力を重ねても、人間の超越的な面を退けるなら、バベルの時のように精神の分裂と言語の混乱を招いてしまいます。

ヨーロッパ統一

〔有識者への講演で指摘されたこと〕

統一ヨーロッパは単なる夢でも中世の空しい思い出でもなくなりました。私たちが証人となった一連の出来事は、到達可能な目標であることを示しています。〔しかし〕これを実現するための過程は、単に政治的、経済的面のみでなく、そうあるべきでもありません。それは同時に文化、精神、道徳という深い面を有するものです。(…)ヨーロッパ統一を追求すると、統一の原点(起源)に向かうことになります。万一、ヨーロッパの歴史を啓蒙主義の理想追求と呼ぶことになれば、新しい統一は表面的で不安定な基礎しか持てないでしょう。キリスト教こそは、(…)ヨーロッパ文化の根源そのものなのです。

〔チェコスロバキアのヨーロッパへの復帰について司教たちに話され、西欧との自由な交流は、単に利益のみではなく危険も予測されると忠告された。〕これら、あり得る否定的現象を予見し、皆さんに任された教会において、世俗主義、無関心、消費快楽主義、実践的物質主義、そして今日広く浸透している形式的無神論のようなある種のウィルスに対する適切な予防を講じることが皆さんの役目です。

司祭たち

〔和解の呼びかけ、地下組織で活躍した司祭も、そうでない司祭も〕、二つの教会ではなく一つの教会です。処罰される危険をかえりみず、地下組織内で司祭職への準備をし、また司祭としての聖務を果してきた司祭たちは全てを乗り越え、完全に扉が閉ざされていた所にも福音の光をもたらしてくださいました。(…)

〔教会で奉仕活動を展開した人々にも感謝された。〕彼らのうちの多くは、信者の世話を続けられるように、皆が皆この方法に賛同したわけではないが、当時の為政者に合わせて〈生きのびる方法〉を受け入れざるを得なかったのです。主の御名においてお勧めします。このような面で犠牲となった人々が受け入れざるを得なかった諸々の制約を忘れ去り、司牧の導きのもと司祭団の完全な一致を取り戻すため決意を新たに司牧に挺身してください。

自由

〔自由を取り戻したチェコスロバキア国民に喜びを表明すると同時に、忠告された。〕皆さんの自由への巡礼は終ったわけではありません。内的解放なしの単なる外的自由は混乱を招きます。皆さんを解放したキリストの自由にとどまってください。(…)神の掟は罪の奴隷から十全な自由へ至る道なのです。

〔要人たちに、道徳的回復の必要性を再確認された。〕中欧・東欧諸国は、唯物論的思想が容赦なく適用された結果、色々な面で生活が麻痺しています。唯物論的思想は、諸々の精神的伝統にも、新世紀を目前に控えた現代の要求にも全くふさわしくないものでした。これらの国は、単に政治、経済の分野のみではなく、精神的、道徳的分野においても回復と刷新が必要です。

聖座との一致

長年、司教不在であった教区を含めて、皆さんの教会は、(言葉のみの)約束や威嚇に屈服することなく、聖座との精神的一致を保ち続けていました。教会をその使徒的基盤から引き離そうとすることは、世の機構、特に全体主義国家の不当な企みへの従属をもたらすことをよくわきまえておられたのです。

公生活における行動

教会内での典礼のみがキリスト信者に許されていた時、皆さんの教会生活は〈根本〉の部分に集中していました。今、その全ての豊かさを広げ、花咲かせなければなりません。教会生活は、単に典礼や秘跡のみに限られているのではなく、文化・教育・福祉の面にまで及ばなければなりません。(…)政治的役割を果すことは聖務者(役務者)にふさわしいことではありませんが、信徒は、自己の可能性に応じて市民生活や政治に参与しなければならないのです。

(九〇・四・二一～二二)

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1990

発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12―6
☎(0797)31―3452

すべての人を愛なる神のもとへ

1　「私には天と地のいっさいの権威が与えられている」(マテオ28・18)

今日、キリストはこの世での使命を締めくくる最後の言葉を述べられます。キリストは、父であり子であり聖霊である神の名について語られます。「私たちは、神の中に生き、動き、存在する」(使徒行録17・28)という通り、無限である神は全てのものを包みこみます。

神の御名は永遠です。黙示録では神を「今在り、かつて在り、のちに来られる主なる全能の神」と呼んでいますが、この言葉は、時とともに移りゆく全ての事象に関する神の秘義をよく表しています。

事実、永遠こそ神の御名です。

神は、愛とも称されます。愛には完全な一致という意味もあります。神は唯一、しかも神のみが唯一です。それは父と子と聖霊の一致、すなわち三位における唯一・一体のことなのです。私たちが知る限り、この世のものでこれに匹敵し、確認できるものはありません。神における完全な一致は三位一体です。

神が三位一体だからこそ神は愛だといえます。三位一体である神のみが愛なる神であり得るのです。このことがなければ、神はただの全能者にすぎません。しかし、愛でない全能者は、完全な全能者ではありません。イエズス・キリストはこの事実を全生涯をかけて人類に悟らせました。使命を終えるにあたり、仰せになりました。「私には天と地のいっさいの権威が与えられている。行け、諸国の民に教え、聖父と聖子と聖霊の名によって洗礼をさずけよ」と。(マテオ28・18～19)　これはつまり人類を、愛である神のうちに沈めなさいということです。人類を神との一致という最も奥深い秘義に導き入れなさいということなのです。人間の精神は、この秘義との出会いを果して完成していかねばなりません。全能の充満とは愛のことです。神は愛なのです。私はあなたたちに神に至る道を示してきた。あなたたちの心に聖霊を吹きこんだ。聖霊はあなたたちの心の中で、神として光を放っている。

福音の道

2　「われらの主、神よ、地に満ち満ちるみ名のその偉大さ」と詩篇(8・2)は歌います。誰もがダビドとともに、被造物に残された神の痕跡、全能者の痕跡を認めて称えます。

キリストは新しい道を敷かれました。愛なる神という道です。「神は御独り子を与えたもうほどこの世を愛された」(ヨハネ3・16)のです。キリストは使命を終えるにあたり、「この道を従いなさい」と呼びかけられました。この道は、私が世界の歴史、人間の歴史に残した消すことのできないしるしだとイエズスは仰せになります。

「在すもの」であらせられる神に届き、神と結ばれることを望むなら私のこの道について来なさい。それは福音全体の道、さらにつきつめると十字架と復活の道である。キリストの言葉と秘跡を通る道、洗礼を通る道である。

実際、水につかると生れかわる。(…)　あなたが特に私の死に「つかる」ことによって、「在すもの」なる神の秘義の深みのうちに自らを見出すことだろう。この秘義の深みの中に自らを見出すことによって、「あるがまま」の神が見えることだろう。イエズスはこう仰せになります。

3　キリストは弟子たちにおっしゃいます。「行け」(マテオ28・19)と。この「行け」という言葉は派遣を示しています。使徒たちは全ての人々を、司祭・預言者・王なるキリストの救いの使命に導き入れるために派遣されました。それは、人人が皆キリストと一つになり、キリストの示された神の国に入れるようにするためです。キリストは神の国に至る道を拓かれ、その道はいつでも開かれたままなのです。

4　新しく司祭になった皆さん、今日お受けになる叙階の秘跡の根源は洗礼にあります。叙階は、洗礼が一人ひとりのうちに始めたことを発展させた結果です。

皆さんは、キリストが全世界に送り出された使徒たちの使命を受け継いでいきます。

皆さんが忠実に務めを果せるよう、「聖霊は私たちの霊とともに証明して」くださいます。

皆さん、マリアが一人ひとりを助けてくださいますように。キリストはマリアに、弟子で司祭のヨハネを委ねられたのですから。

キリストの力が皆さんのうちでますます強められますように。「天と地のいっさいの権威」はキリストに「与えられて」いますから。

キリストの福音と十字架と復活が、皆さんの中で絶えず息吹いていますように。いつも福音に熱中してください。

一人ひとりがあとに「残る」(ヨハネ15・16参照)実を結びますように。皆さんの力によって、人類が愛であらせられる神、愛における全能者に近づけるような実を結んでください。

現代人には、この事実が理解できるでしょうか。理解するには余りにかけ離れすぎてはいないでしょうか。

しかし、皆さんを遣わされたキリストはおっしゃっています。「私には天と地のいっさいの権威が与えられている」と。

恐れることはありません。皆さんはキリストの力、天と地を司どるキリストの力において遣わされています。恐れないでください。

(八八・五・二九)

司祭は祈りの人

(…)　荒野で四十日間をすごされたイエズスは祈りに専念なさいました。一人御父に向かって祈られました。御父のことを考え、御父に話しかけ、御父にご自分の使命を委ねられました。

宣教の開始を前にしたこの祈りの四十日間は、全ての人にとって、特に司祭にとって大きな教訓となっています。司祭は、自分に委ねられた人々に貢献して働く人であるばかりでなく、とりわけ祈りの人でなければなりません。前回の話で私は司祭を神の人と呼びましたが、神の人とは祈りの人のことなのです。

司祭の形成に必要な事柄として含まれているように、次の世界代表司教会議では、職位的司祭職にとって最重要点である祈りの大切さについても必ず考察されるでしょう。司祭になるための準備をしている方々は祈りの修業をしなければなりません。

司祭にとって祈りとは、使徒としての使命にも個人の生活にも不可欠なものです。司祭はその生涯をキリストに根本から委ねていなければなりませんが、そのために祈りは欠かせません。祈りのうちに神と語らい、キリストとの深い個人的つながりを保たなければ、またキリストとの交わりの中でキリストにいつも目を向けていなければ、全存在をもってキリストと一つになることはできない

説教・講話・書簡等の抄訳

でしょう。

使徒としての使命を果すためには絶え間ない祈りが必要です。それは司祭の働きの全てがキリストによるべきであり、キリストの恩寵から出る実りのみを望むべきだからです。司祭は自分に委ねられた人々のために祈らなければなりません。祈りという仕事を担っているのです。祈りを通してのみ人々のために多くの恵みを得ることができるでしょう。

ヘブライ人への手紙では、キリストは私たちのために絶え間なく執り成してくださる司祭として記されています。「(キリストは、)ご自分によって神に近づく者のために取り次ごうとして常に生き、その人々を完全に救われる。」(ヘブライ人7・25)キリストのかたどりである司祭は、絶えず取り次ぎの使命を実行しなければなりません。

◇というわけで、司祭職を目指している方々は祈りの修業をしなければなりません。まず、祈りが司祭としての生活とその役務に不可欠であるという確信をもたなければなりません。祈ること、よく祈ること、祈りの時間を自分に合った方法で可能な限り上手に利用することを学び、そのうえで祈りを愛し、祈りを望み、祈りを実行していかなければならないのです。

聖母マリアにお願いしましょう。祈りについて行われる司祭の形成を見守ってください。教会の生命にとって不可欠な、司祭職における祈りについて、考察と決定が正しくなされるように世界代表司教会議をお導きください。(九〇・三・十一)

人間の罪と〈世の罪〉

「罪」シリーズ ⑧

1 信仰にてらして考えると、罪についてのこのカテゲージスでの吟味の直接の対象は自罪(個人の犯す罪)です。それは、アダムの子孫の全てに影響を残した最初の罪(それ故に原罪と呼ばれている罪)に関係しているものです。原罪の結果として、人間は遺伝によって倫理的に弱い状態で生れます。もし、キリストの贖いによる神から人類に与えられた恩寵との一致がなければ、簡単に自罪の道をたどります。

第二バティカン公会議はこの点に注目し、次のように記しています。

「人間の全生活は、個人的にも団体としても、善と悪、光とやみの間における劇的な戦いとして現われる。むしろ人間は自分自身の力では悪の攻撃を効果的に退けることができないことを発見し……。しかし、人間を解放し力づけるために主みずからが来られて人間を内部から再生」する。(『現代世界憲章』13)　自罪についての考察は、すべて堕落した人間の本性の状態につながる緊張と闘争の関係という立場でなされるべきです。

2 自罪はこの本質的な性質、つまり常に一個人の責任ある行為であり、道徳法とは相容れない行為、神の意向に反する行為であるという面をもっています。この行為の中に暗に含まれ、必然的に伴われるものを見つけ出すのに聖書が役立ちます。すでに、旧約聖書中に、神の啓示に照らされて様々な瞬間や状況での罪の実体を指摘するための表現が見られます。それは、時には単に〈悪〉と呼ばれ、罪を犯す人は「主の目の前で悪を」行います。(第二法31・29)それゆえ、〈神を恐れない〉者と命名されている罪人は、「神を忘れる」人であり(詩篇9・18参照)、「神を知りたくない」人(ヨブ21・14)、「その目に神への恐れがない」人(詩篇35・2)、「主によりたのまない」人(同31・10)なのです。実に「主は見ない」(同93・7)、「主は仇をとるまい」(同10・13)と確信し、悪人は神をあなどります。(同10・13)さらに、罪人(神を恐れない人)は義人を虐待するのを恐れず(同11・9)、「やもめやみなし子に罪深い裁きを行い」(同81・4、93・6参照)、「善のかわりに悪でかえし」(同108・2～5)さえするのです。聖書では罪人の反対は義人です。罪は、この語のもつ最も広い意味での不義です。

罪は不義であり、犯罪であり、汚点である

3 幾多の様相をもつ不義には、他人に対してなされた悪事、罪深い行為によって他人の権利を侵害するという概念があります。また、長上に対する〈反抗〉の意味もあります。反抗が預言書で読むような神に対して向けられたものならば、なおさら容易ならぬものと言えるでしょう。「私は子らを養い育てたが、彼らは私に逆らった。」(イザヤ1・2、48・8～9、エゼキエル2・3)

罪は〈不義〉を意味しています。同時にこの語は、聖書によると、罪を犯したゆえの人間の邪悪な状態を意味します。語源上この語は、〈正しい道から逸脱すること〉、〈不正をすること〉、あるいは〈形を損なうこと〉つまり実際に正義を外れていることを意味するものです。不義の状態という意識は、カインの激しい後悔の告白においてはっきりとみられます。「私の罪は許しがたいほどに大きい」(創世4・13)　また詩篇にも「その罪は私の頭を越え、重荷のように、私は荷を負いすぎた」(37・5)とあります。犯罪行為(不義)は、神との関係の断絶の意味を含み、語源に〈隣人に関して欠点をもつこと〉という意味をもっています。詩篇作者もこのことに気づき、次のように述べています。「あなたに向かって、私は罪を犯し、御目の前に悪事を行った。」(50・6)

4 聖書によれば、罪は〈不義〉という本質から神に逆らった犯罪であり、神の恩寵に対する忘恩であり、至福なる御方を侮辱することでさえあります。「主の前で悪事をするほど主を軽んじるに至ったのはどういうわけだ」と預言者ナタンは、罪を犯したダビドに尋ねます。(サムエル下12・9)　罪はまた汚点であり不潔です。それゆえエゼキエルは罪とともに汚れについて語ります。(エゼキエル14・11参照)特に偶像崇拝の罪について、預言者たちは〈淫行〉と比して度々述べています。(ホゼア2・4、6～7参照)ですから詩篇作者でさえ乞い願います。「ヒソプをもって清めれば、私は清くなり、洗えば雪よりも白くなる。」(50・9)

同じ流れで考えると、福音書のイエズスの言葉が一層よくわかるでしょう。「人から出るものこそ人を汚す。すなわち悪い考えは内から、人の心から出る。淫行、窃盗、殺人、姦淫、貪欲、邪悪、詐欺、猥褻、嫉妬、誹謗、傲慢、愚痴、これらの悪いことはみな内から出て人を汚すものだ。」(マルコ7・20～23、マテオ15・18～20参照)　新約聖書中の罪を示す語彙は旧約聖書ほど多くないことに注目すべきです。特にギリシア語での〈不正〉〈不義〉〈神の王国に対する敵対〉(マルコ7・23、マテオ13・14、24・12、ヨハネ①3・4参照)という語が用いられていますが、また、〈過失〉〈欠点〉、あるいは〈負債、例えば『私たちの負い目をもおゆるしください』すなわち罪〉という言葉でも表されています。(マルコ6・12、ルカ11・4)

罪は　意識してなされる自由な行為である

5 罪が人間の内から、人の心から出るものというイエズスの言葉をみましたが、この言葉は罪の本質を強調しています。人間の内から生じ、人間の意志の中にあるので

不変の教え

すから、罪はまさにその本質から常にその人の行為なのです。意識してなされる自由な行為の中には、人間の自由意志が表れます。倫理的価値は、自由の原則を土台としなければ、敬虔という事実の上でなければ成立しないものです。この限りにおいてのみ、その行為が倫理的に悪であると評価することができるのです。ちょうど、客観的倫理基準に従って、また最終的には神の意向によって、一つの行為を善と評価し、認可するように。個人の責任は、自由意志から生じるものにおいてのみ立証されるものです。人が自由に意識しておこなう行為が、倫理基準(神の意向)に、法に、掟に、最終的には良心に敵対しているという意味においてのみ、その行為は罪となります。

6 聖書の中で語られる罪とは、この各々、個人的という意味においてです。聖書は原則として、特定の対象、罪の原因となる人間に言及するからです。文中に〈世の罪〉という表現が出てくる場合でも、少なくとも因果関係と責任に関して個人的なものであることは否定されません。〈世〉は、罪の原因にはなり得ません。世の中にいる理性ある自由な存在、つまり人間(あるいは前回のカテケージスでみてきた、存在のもう一つの領域にいる創られた純粋な霊すなわち天使)でなければ、罪の原因になり得ないのです。

〈世の罪〉という表現はヨハネの福音書に見られます。「世の罪を取り除く神の小羊を見よ。(1・29)典礼書は〈世の罪〉といっています。ヨハネの第一の手紙の中には次の文があります。「世と世にあるものを愛するな。……世にあるもの、すなわち肉の欲、目の欲、生活のおごりなどはすべて御父から出るのではなく世から出る。(2・15～16)さらに一層厳しく「私たちが神から出た者であり、世がすべて悪者の配下にあることも私たちは知っている」(5・19)とあります。

7 〈世の罪〉についてのこれらの表現を、どう解すべきでしょうか? 引用された文において、〈世〉は神の創造の時の〈世〉ではなく、ほとんど神に閉ざされた霊的空間である特別な次元としての世であり、そこでは、創造された自由の土台の上に悪が生じる、とはっきりと指摘しています。〈昔の蛇〉(創世3章)すなわちサタン、〈嘘の父〉の影響によって人祖の〈心〉に伝えられたこの悪は、まさに人類史の初めから、悪の実をみのらせてきました。原罪は引き続いて後に「悪の欲望の萠芽、あるいはそそのかし」すなわち人間を罪に誘う三重の欲情を残しました。それが働きだすと、人類の犯した数多くの自罪が新たな自罪の起る状況を生み出し、ある方法で一人ひとりをそこへ引きつける一種の〈罪の環境〉を形成するのです。従って〈世の罪〉は原罪と同一視するわけにはいきません。むしろ〈世の罪〉は、各世代の歴史、人類の歴史全体における原罪の結果を総合・要約したものです。そうなるとまた、人間の様々なイニシアティブや性向、業績や慣例という文化や文明を構成するもの全体の中に、罪が刻印されていると言えます。この意味で、構造上の罪と言われる罪を一種の〈伝染病〉にたとえることができるでしょう。この伝染病は、人間の心から、人間の生活する環境、人間の存在を支え決定する構造の中に入りこみ広がってゆくのです。

罪には社会的次元がある

8 罪は、一方では個人的行為という本質をもちながら、他方社会的面をも有しています。一九八三年のシノドス後の使徒的勧告『和解と悔悛』の中で、これについて話しました。あの文書に記したように〈社会的罪〉と言う時、まず第一に個人的罪が何らかの形で他者に影響を及ぼすことを知らねばなりません。神秘で不可解ではあっても、現実に具体的に人間は互いに結びついているからです。この人間同志の結びつきの他の局面は、深遠ですばらしい聖徒の交わりの中で展開される信仰のレベルでの結びつきです。聖徒の交わりのおかげで、「すべての霊魂は自らを超越し、この世を向上させる」ことができたのです。この上昇の法則に対して、不幸にも下降の法則があります。それゆえ、罪の交わりについても述べることができます。罪によって下落した霊魂は、罪の交わりにより教会を、場合によっては全世界をも、己(おの)れと共に引きずり落とします。(『和解と悔悛』16)

そこで勧告は、〈社会的罪〉として特記すべき罪について述べています。このテーマは、もう一つのカテケージスのシリーズの中でふれることになるでしょう。

9 〈社会的罪〉が聖書の〈世の罪〉とは同じでないということは、今まで述べてきたことから十分に明らかです。けれども、〈世の罪〉を理解するためには、罪の個人的な面ばかりでなく、その社会的面をも考慮しなければならないことを認めねばなりません。勧告では次のように続けています。「心の奥底の人目にはふれない罪、極めて厳密にみての個人の罪でさえ、排他的に罪を犯す本人だけの問題にとどまるような罪はありません。強かろうが弱かろうが暴力を用いて、多いにしろ少ないにしろ害を与えることによって、どの罪も全て、全教会、全人間家族に影響を及ぼします。この用語の第一の意味によれば、すべての罪は疑いもなく社会的罪と考えられます。」(16番)そしてこの見地から、なぜこの世が、〈世の罪〉について語る際に、聖書がほのめかすあの特別で否定的な霊的状況に陥るのか、ということは、罪の社会的面ということを考えれば、より一層の理解が得られるのだと結論づけることができるでしょう。

(八六・九・五)

祈りはすべてのキリスト信者の生活にとって絶対に欠くことのできないものですが、家族で唱える祈りには特別な意味があります。(68)

＊＊＊

祈るとき、私たちは神を称(たた)えている。祈りのない信者の生活など考えられない。イエズス御自身も本当によく祈られた。この世の悪の力に対抗するにあたって、最も強力な武器は祈りである。(72)

＊＊＊

困っていることを神に話すだけが祈りではない。神が何を望んでおられるかを知るために沈黙するのも祈りである。勇気を出して祈り、静寂の中、静かに語りかける神の声に耳を傾けよう。(72)

＊＊＊

告解(ゆるし)の秘跡は、家族の成員に、回心に必要な恩寵や、罪が家族にもたらしたどんな不和にも打ち勝つことのできる恩寵を与えます。(68)

＊＊＊

默想のしおり

神は慈しみ深い御方ですから、私たちは罪を告白しなければなりません。罪を告白するたびに、私たちは神の慈しみを賛美します。(72)

＊＊＊

罪を赦すイエズスは必ず、人生途上に出遭ういろいろな困難を克服する力を与えてくださる。(72)

＊＊＊

苦しんでいる家族のために祈りましょう。愛と生命に仕えるという重大な使命と、結婚の不解消性を危険にさらす数々の困難におそわれている家族、神に選ばれた家族のためによく祈りましょう。(69)

※()内は『教皇様の声』の号数です。

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月十日発行　■定価一部八十円　送料実費
■一年予約九〇〇円　送料六〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要
郵便振替 神戸 3-72393